

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520763

研究課題名（和文） 古墳時代前期における小型古墳の展開と政治秩序の形成に関する研究

研究課題名（英文） A STUDY ON THE SMALL TOMBS AND THE FORMATION OF POLITIES IN THE EARLY KOFUN PERIOD

研究代表者

滝沢 誠 (TAKIZAWA MAKOTO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90222091

研究成果の概要（和文）：本研究では、古墳時代前期の小型古墳を分析することにより、当該期における政治秩序の形成過程について検討をおこなった。当該期の小型古墳にはしばしば、地域を越えて共通する独自の墳墓要素が認められ、そこには小型古墳被葬者どうしの広域的な結びつきが想定される。加えて、そうした墳墓要素の系譜は、近畿地方に求められる可能性が高い。これらのことから、古墳時代前期には中央政権と地方の中間層を直接的に結びつける政治秩序が先駆的に形成されていたと結論づけた。

研究成果の概要（英文）：This research examined the formation of polities by analyzing the small tombs in the early Kofun period. From the fact that the small tombs have original elements across the area, broad-based relationships of the small tombs are assumed. Moreover, Kinki district is asked for the genealogy of many original elements. In conclusion, it is assumed that the direct relationships between a central government and the some middle class in the local areas were formed in the early Kofun period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：古墳時代、小型古墳、墳墓要素、政治秩序

1. 研究開始当初の背景

古墳時代後期に爆発的な増加をみせる群集墳に先駆けて、木棺直葬などの竪穴系埋葬施設をもつ小型古墳がひろく存在することに学界の関心が寄せられるようになったのは1970年代以降である。「古式群集墳」あるいは「初期群集墳」と呼ばれるそれらの性格をめぐっては、弥生時代の小型墳墓群（方形区画墓群）と古

墳時代後期の群集墳をつなぐ存在として造営主体の階層的連続性を重視する見解が示されたいっぽうで（石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』4、1980年など）、弥生時代からつづく小型墳墓群とは内容的に断絶があるとして、その成立の背景にヤマト政権による政治秩序の拡大を読みとろうとする見解が提示された

(白石太一郎「群集墳の諸問題」『歴史公論』7-2、1981年など)。

そうした初期の研究は主として近畿地方の事例にもとづくものであったが、その後各地での事例が増加すると、墓域内の群構成や前後する小型墳墓群との連続性、周辺の大型古墳を含めた階層構造などに焦点をあてた研究が展開されるようになった。そこでは、古墳時代中期後半から後期前半にかけての小型古墳が主に取り上げられ、当該期にはヤマト政権による政治秩序が大型古墳被葬者の支配下集団にも拡大していったとする見方が形成されていった。

たしかに、以上のような理解を裏づける資料は各地に認められるが、一方で、奈良県磐余池ノ内古墳群や静岡県若王子古墳群など、古墳時代前期から中期にかけて形成された小型古墳の群集が存在することも周知の事実である。また、若王子古墳群が所在する静岡県中部の志太平野には、古墳時代前半期の大型古墳が認められず、そこに一定地域を単位とした重層的な政治秩序の拡大という図式を適用することは困難である。

研究代表者は、こうした古墳時代前半期の小型古墳に着目し、この間、静岡県の志太地域を対象として具体的な事例分析を進めてきた(「志太平野における古墳時代前・中期の小型墳」『焼津市史研究』第4号、2003年)。その中で、古墳時代前期末から中期初頭になって顕在化する割竹形木棺や集水坑、土器の棺内副葬という要素に弥生時代墓制との明確な断絶が認められること、また、埋葬施設中央部に小土坑をともなう事例が近畿地方などでも小型古墳に限定されることを明らかにし、その背景に小型古墳被葬者間の広域的な結びつきを想定した。

本研究は、以上のような近年の取り組みによって得られた見通しを、さらに広範な資料の分析によって検証しようとしたものである。

2. 研究の目的

古墳時代の政治秩序をめぐる従来の議論の中で、古墳時代前期および中期においては、各地の大型古墳に葬られた有力首長層と近畿地方の政治勢力との間に直接の政治的関係を認め、各地の小型古墳被葬者については、地方有力首長の政治的支配下にあつて、近畿地方の政治勢力との関係はなお間接的なものとする見方が少なくない。とくに古墳時代前期の小型古墳については、弥生時代墓制の系譜に連なる在地性の強い存在とみなす研究もあり、そうした見方が小型古墳の被葬

者像を地域的な枠組みの中に押しとどめてきたという側面は否定できない。もとより、そうした見方の背景には、小型古墳の墳墓要素に関する広域的な検討が、大型古墳のそれに比べて十分に行われてこなかったという学史上の問題点がある。

そこで、あらためて古墳時代前期における小型古墳の諸要素を見直すと、そこには地域を越えた共通性の高い墳墓要素を見出しうる事例がある。しかもそうした共通の墳墓要素は、近隣の大型古墳に認められる墳墓要素を介して理解しうるものではなく、そこには地域を越えた小型古墳被葬者間の結びつきを読みとることができそうである。そのような小型古墳のあり方は、古墳時代前半期の政治秩序を構造的かつ広域的に把握していく上での重要な手がかりとなりうる可能性がある。

以上の問題意識のもとに、本研究では古墳時代前期(および中期前半)の小型古墳を対象を定め、主として東日本での事例分析をつうじて、小型古墳被葬者間に認められる広域的な結びつきの背景を明らかにすることを第一の目的とした。さらには、古墳時代前半期における政治秩序の形成過程を視野におさめながら、小型古墳の性格を再評価することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究では、これまでに確認されている古墳時代前半期(前期～中期前半)の墳墓群を比較検討し、そこから遠隔地間の小型古墳に共通する墳墓要素の抽出を試みることにした。その基礎的な資料を収集するため、各年度において以下の資料調査を実施した。

(1)2010年度

- ①静岡県麓山神社後古墳出土遺物実測調査(東京国立博物館)
- ②岐阜県龍門寺古墳群出土遺物実測調査(岐阜市博物館)
- ③岐阜県船来山古墳群出土遺物実測調査(本巣市教育委員会)
- ④奈良県磐余池ノ内古墳群出土遺物実測調査(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)

(2)2011年度

- ①長野県中山36号墳出土遺物観察調査(松本市考古博物館)
- ②静岡県鳥羽美古墳出土遺物実測調査(島田市博物館)
- ③静岡県城山古墳出土遺物実測調査(島田市博物館)
- ④愛知県豊橋市内古墳出土遺物観察調査(豊

橋市美術博物館)

⑤福岡県神領古墳群出土遺物観察調査(宇美町立歴史民俗資料館)

(3)2012年度

①岐阜県舟来山 24 号墳出土遺物実測調査(東京国立博物館)

②静岡県秋合 1 号墳出土遺物実測調査(藤枝市郷土博物館)

③静岡県五鬼面 1・2 号墳出土遺物実測調査(藤枝市郷土博物館)

④静岡県岩田山 31 号墳出土遺物観察調査(藤枝市郷土博物館)

⑤愛知県三ツ山 2 号墳出土遺物観察調査(小牧市教育委員会)

4. 研究成果

本研究では古墳時代前半期の小型古墳に認められる共通の墳墓要素について様々な角度から検討をおこなった。その中で、従来から注目してきた、棺床に小土坑をともなう埋葬施設についてさらに詳細な分析を進めることができた。以下にその概要を記す。

(1)小土坑をめぐる議論

古墳時代前期から中期にかけては、中小規模の古墳において木棺直葬の埋葬施設がひろく採用されており、そうした埋葬施設の中には、棺床の中央部や小口部に小規模な土坑を設けたものが知られている。古くは、1950～60年代に調査された大阪府珠金塚古墳、岐阜県竜門寺 15 号墳での確認例があり、両古墳では小土坑の内部に礫を充填していたことから、調査者らは排水・排湿の機能をもつものと想定した。

その後 1980 年代になると、朴美子が奈良県北原古墳の調査報告書において全国の事例を集成し、その構造や機能、系譜について詳細な検討をおこなった(「埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察」『宇陀北原古墳』大字陀町役場、1986 年)。朴は、朝鮮半島の事例を含む 16 古墳 18 例を取り上げて多角的な分析を加えた。

朴による研究は、この特異な小土坑を正面から取り上げた初めての研究として高く評価されるものである。しかし、当時すでに知られていた静岡県下の多くの事例が分析に組み込まれておらず、また、特異な小土坑をともなう埋葬施設が列島内の広範囲に分布するにいたった背景についても言及されることはなかった。

この朴による研究以降、問題の小土坑を正面から取り上げた研究は見当たらない。本研究では、以上に述べた先行研究の成果と課題をふまえて、あらためて棺床に小土坑をともなう堅穴系埋葬施設についての基本的な整理をおこない、その上で当該埋葬施設が採

用された背景を検討し、古墳時代前半期における小型古墳の性格について考察を加えることとした。

(2)分類

棺床に小土坑をともなう堅穴系埋葬施設の事例は、管見による限り、古墳数で 27 例、埋葬施設数で 31 例を確認することができる。なお、ここでは棺床から直接掘り込まれたとみられる小土坑を集成の対象としており、堅穴式石室などの基底部に設けられたものや溝状のものについては除外してある。

これらの小土坑は、その平面形態、構造、配置によって以下の分類が可能である。

平面形態の分類

A: 方形を呈するもの

B: 円形を呈するもの

C: 楕円形を呈するもの

D: 長楕円形を呈するもの

E: 小円形を呈するもの

構造の分類

a: 礫をともなうもの

b: 素掘りのもの

配置の分類

1: 棺床の中央部に配置されたもの

2: 棺床の小口部に配置されたもの

実際の資料についてみると、こうした基本要素の組み合わせは 15 類におよび、きわめて多様性に富んでいる。したがって、現在確認されていない組み合わせが今後追加される可能性は否定できないが、小土坑の分類状況を大局的にとらえるならば、次の二つの傾向を指摘することができる。第一に、円形のもの全体の 1/3 程度を占め、それ以外の形態は比較的少ないという点である。第二に、小円形以外のものでは棺床の中央部に配置されたものが多数を占めるのに対し、小円形のものでは小口部に配置されたものが多いという点である。

(3)機能

棺床に設けられた小土坑のうち、内部に礫をともなうものについては、排水・排湿用とする見方が早くから示されている。いっぽう素掘りのものについても、本来は空洞であったと考えられること、また、礫を詰めたものと同一古墳群中に共存している事例が存在することから、礫をともなうものと同様の機能を想定して差し支えないであろう。

ところで、集水や排水という機能を想定する場合、基本的に棺床の傾斜がそれに対応したものでなければならない。そこで、小土坑の配置と棺床の傾斜に着目すると、ほとんどの事例が棺床の全体もしくは半分程度からの集水機能を果たしうる条件を備えている。そもそも小土坑が棺床全体の集水を意図したものなのか、局所的な集水を意図したもの

なのかという問題は未解決であるが、棺床の傾斜という点からも、大半の事例において何らかの集水機能を想定することができる。

(4)系 譜

小土坑の系譜については、すでに指摘されているように、古墳時代前期後葉の竪穴式石室や粘土槨に設けられた排水（集水）用の長方形土坑に求められる可能性が高い。おそらく、大阪府駒ヶ谷宮山古墳前方部2号粘土槨（割竹形木棺）のような事例が祖型となり、その簡略形態として棺床の小土坑が成立したものと考えられる。

ただしここで問題となるのは、なぜ本来は小口部付近に設けられていた土坑が棺床の中央部に設けられるようになったのかという点である。この点に関して注目されるのは、埋葬遺体数との関係である。

今回集成した事例の中には、同一棺2体埋葬（縦列配置）の事例が7例認められるが、それらの事例はいずれも長さ5m前後の割竹形木棺を採用したもので、6例は棺床の中央部に小土坑を配置している。いっぽう1体の埋葬が想定される事例は4例で、いずれも小口部に小土坑を配置している。

このように埋葬遺体数に着目すると、2体埋葬が想定される事例では長い棺と中央部配置の小土坑が認められ、1体埋葬が想定される事例では短い棺と小口部配置の小土坑が認められるという基本的な関係を把握することができる。こうした関係性を埋葬遺体数が明らかではない事例を含めて確認すると、中央部配置の事例では21例中18例が長さ4m以上の棺（割竹形木棺）を採用しているのに対し、小口部配置の事例では7例中5例が4m以下の棺を採用している。

以上の整理から、中央部配置の小土坑と同一棺2体埋葬の間には何らかの関係が予想される。もちろん、同一棺2体埋葬の事例すべてに中央部配置の小土坑がともなっているわけではないので、両者の関係を一般化することはできないが、同一棺2体埋葬という特殊な埋葬行為を実施した人々の一部に、棺床の中央部に小土坑を設けるというさらに特殊な行為が共有されていた可能性がある。

(5)変 遷

棺床に小土坑をともなう埋葬施設のうち、年代的に古く遡る事例の多くは、静岡県の志太平野で確認されている。ただし、それらの事例はいずれも在来墓制の中には認められない割竹形木棺とセットで存在しており、小土坑自体も在地で独自に成立したものとはみなし難い。そもそも小土坑をともなう埋葬施設は、割竹形木棺を採用したものが大半を占めており、先にみた祖型となる排水（集水）施設の存在状況からも、その成立は近畿地方

もしくはその周辺部に求めるのが妥当であろう。

そこで、先の分類にしたがって小土坑の変遷を整理すると、初現期となる前期末ないし中期初頭に、方形、円形、楕円形の各平面形態が認められる。また、それらの中には、礫をともなうものと素掘りのものがともに存在する。これらは基本的に、「方形+礫詰め」から派生したものと考えられ、その簡略化の過程でいくつかの変異を生じたものと考えられる。いっぽう、小円形のものでは中期前半にまで遡る確実な事例はなく、遅れて出現した退化形態と考えることができる。また、「楕円形+礫詰め」は、志太平野とその周辺地域にしか認められず、中期後葉まで存続した地域的な変容形態である可能性が高い。

(6)前半期小型古墳の評価

①広域的な紐帯

棺床に小土坑をともなう埋葬施設は、すべて円墳や方墳に認められ、墳丘規模はほとんどが20m以下である。その分布についてみると、北部九州地域、奈良県宇陀地域、東海西部地域、東海東部地域（志太平野）、関東西南部地域などに点在しているが、全体としては近畿地方以東に偏在している。

以上の事実から、棺床に小土坑をともなう埋葬施設の被葬者には、共通の階層的性格を読みとることができる。と同時に、特異な墳墓要素を共有するという強い結びつきが、広域かつ点的にひろがっている状況を確認することができる。このような小型古墳（前期末～中期前葉）に特有な墳墓要素は、副葬品組成の類似という点からも傍証しうる可能性がある。

②あらたな政治秩序

これまでの検討結果を総合すると、前期末～中期前葉には、なお一部の地域にとどまるものの、遠隔地の小型古墳被葬者どうしを結ぶ何らかの紐帯が形成されていたと考えられる。小型古墳が共有する各墳墓要素の系譜についてはなお検討を要するものの、今回取り上げた小土坑や割竹形木棺の系譜から判断して、そうした墳墓要素の発信源となったのは近畿地方の政治勢力であった可能性が高い。とすれば、その背後には、中央政権が地方の中間層と直接の関係を結び結ぶ、新たな政治秩序の展開が想定される。甲冑出土古墳の存在形態などが示すように、そうした政治秩序が本格化するのには中期後葉以降と考えられるが、前期末～中期前葉に造営された小型古墳の存在形態は、それに先駆けた萌芽的な動きを示すものであろう。

③階層構造論の問題点

上記の理解によれば、大型古墳被葬者のもとに小型古墳の被葬者が単純に組み込まれていたとする見方には再考の余地がある。た

たとえば、静岡県の志太平野では、前期末～中期前葉の小型古墳盛行期に大型古墳（前方後円墳）は築かれていない。本研究で指摘したように、そうした小型古墳の成立は、中央政権と小型古墳被葬者を結ぶあらたな政治秩序の形成という視点からとらえ直す必要がある。たしかに地域社会に視点を定めた研究は重要であるが、地域首長を頂点とした垂直方向の構造的な理解や特定地域内における時系列的な理解のみでは、前半期小型古墳の歴史的な性格を見失うおそれがある。

(7) 成果と課題

本研究で取り上げた小土坑をともなう埋葬施設が示すように、古墳時代前期末から中期初頭に出現する小型古墳には、地域を越えた広域的な結びつきがうかがえる。そうした小型古墳の歴史的な性格を、初期群集墳や後期群集墳との比較の中で位置づけていく作業は今後の課題としなければならないが、本研究ではその方向性として、これまで以上に空間的な視野をひろげた検討が必要であることを明確にすることができた。すなわち、小型古墳の墳墓要素にみられる広域性が古墳時代前半期の政治秩序を理解する上で重要な論点となりうることを示した点に、本研究の大きな意義があると考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①滝沢 誠、古墳時代前半期における小型古墳の性格、筑波大学先史学・考古学研究、査読有、第25号、2014、pp.1-20（掲載決定）

②滝沢 誠、東日本における古墳時代の斜交埋葬施設、筑波大学先史学・考古学研究、査読有、第23号、2012、pp.1-20

〔学会発表〕（計1件）

①滝沢 誠、古墳時代前半期における小型古墳の性格、歴史人類学会、2012年10月20日、中央大学駿河台記念館

〔図書〕（計1件）

①滝沢 誠、平林大樹、西田真由子、静岡大学人文学部考古学研究室、春林院古墳の研究－出土遺物の再整理－、2011、46

6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝沢 誠 (TAKIZAWA MAKOTO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90222091